

# 英文ニュース記事を教材として利用する場合 どのような基準で選ぶべきか

—リーダビリティ・スコアを用いる場合—

## What Criteria Should be Used When Selecting English News Articles as Teaching Materials?

—Focusing on Readability Score—

梶原 克巳

Katsumi MASUHARA

*Keywords* : reading, readability, news articles, English newspapers, teaching materials

キーワード：リーディング、リーダビリティ、ニュース記事、英字新聞、教材

### 1. はじめに

英語の指導者は指導法に関して、日々頭を悩ませるものである。その悩みの1つが教材選びである。教材選びはファッションにおける洋服選びに似ている。どれほど高級な素材でできている服だとしても、サイズが合わなければ着る者にとって不快である。また、サイズが合っていたとしても、色やデザインなどが好みに反するならば、その服を着たいとは思わない。つまり理想的なのは、その服が好みの色やデザインであり、かつサイズが合っている場合である。そのような場合、着る者にとって非常に快適で積極的な気分になれるのである。このことは英語教材に関してもあてはまるだろう。服のサイズは教材の難易度、色やデザインなどの好みは教材の内容である。仮に、教材の難易度が高すぎる場合、服が体にフィットしないように、教材は学習者に適合しない。難しいので理解不能となり、学習効果はあまり期待できない。逆に簡単すぎる場合、学習者の集中力をそいでしまうこともあるかもしれない。また、内容に興味を持ってない場合も、気に入らないデザインの服を着たくないと感じるように、勉強する意欲を持つことが難しいだろう。従って、学習者にとって理想的な教材は、興味・関心のある内容であり、かつ英語力に適した難易度のものであると言えよう。

本研究で扱う教材は、リーディング指導におけるニュース記事である。ニュース記事は英語教育の現場で利用されることが少なくない。大学はもちろん、高等学校においても利用されることはしばしばである。なお、リーディング指導の内容は多様であって「文法理解のための精

読」「情報収集のための速読やスキミング」などがありうる。しかし、ここでは一般的な意味でのリーディングを指すこととする。つまり、「記事を読んで内容を把握すること」を念頭に置く。

本論文では、「ニュース記事は学習者にとって関心があるものか」について触れた後、以下のリサーチ・クエスチョンに関して考察を行う。

- ①ニュース記事は、どのマスメディアのものを使用すべきか。
- ②ニュース記事の難易度に差異はあるか。
- ③難易度の指標は何を用いるべきか。

## 2. 教材としてのニュース記事の適切性

### 2. 1 NIE 活動と英語教育

NIE（エヌ・アイ・イー）とはNewspaper in Educationの略であり、学校などの教育における新聞の利用である。NIEの実践は世界中で行われており、日本においても国語、公民、家庭など様々な教科で行われている。

NIEの始まりは1930年代のアメリカであり、日本で提唱が始まったのは1985年である。NIEの目的は、社会性豊かな青少年の育成や活字文化と民主主義社会の発展などである。経済協力開発機構（OECD）の「生徒の学習到達度調査（PISA）2009年」によると、子供たちの総合読解力と新聞の閲読頻度に相関関係がある（Newspaper in English 教育に新聞を）。新聞閲読頻度が高いほど総合読解力が高いことは、日本を含めた世界各国の子供に共通している。従って、教育現場において新聞を活用することは非常に有益と言えよう。

そこで、英語教育にも新聞を活用しようとするのは自然な流れである。ただし、気をつけなければならないのは、英語科とそれ以外の科目との根本的な違いである。すなわち、それ以外の科目においては、新聞は日本語で書かれたものが使用されるが、英語科においては英字新聞が利用されるのが一般である。そして、英字新聞を英語の授業で用いる際の大きな問題は、概して「英字新聞が難しい」ことである。例えば、教科書に出てこない語彙がかなり登場し、しかも新聞独自の語彙の使用があるからである（上西 1998）。

ただ、この問題点是对処が可能である。そして、その主要な対処法こそが教材選びなのである。学習者の英語力に合った難易度の教材を選定することが大事である。英語科における教材選びは他の教科に比べ、より一層重要になってくると言える。

### 2. 2 英字新聞の有用性

学習者の英語力に適合した難易度の新聞記事を選定できたならば、それを英語学習の様々な面で役立てることができる。水野（1983）によれば、英語の授業に対して学習意欲を喚起するという目的を達成する最良の方法のひとつは英字新聞と読解である。

高校生や大学生は近い将来社会人となるのだから、英字新聞によって社会の様々な事柄を学ぶことができ有意義である。新堀（2005）によれば、英字新聞は政治経済や社会問題についての知識を得るきっかけになる。田嶋（1996）によれば、英字新聞を外国語学習に導入することの目的は次の通りである。

- ①英字新聞を通して教科書等で学んだ語句等の再発見や、文字から得る喜びや感動を得させること
- ②社会情勢や国際情勢に視野を広げ、自分なりの意見を持ち、述べることができるようになること
- ③自分の身の回りの社会をはじめ、他の国々の多様な文化や価値を理解し、国際理解や異文化理解の基礎を培うと同時に、日本の文化や伝統、身近な人々への理解を深めさせることとすれば、これらの目的が達成された場合学習者にとって英字新聞は大変役立つものになると言えるだろう。

### 2. 3 学習者の興味

教材選定の際にもう1つ問題となるのは、内容が学習者の興味に合っているかである。仮に学習者の難易度に適合したニュース記事を選定できたとしても、その内容が学習者にとって興味深いものとなるのか。また、そもそもニュース記事を教材とすること自体が学習者の関心を集めることになるのか。

その点は問題がないと言える。例えば、上西（1998）の調査結果が参考になる。上西は、高等学校3年生17名の英語のリーディング・クラスにおいて英字新聞を使用して授業を行った後、アンケート調査を実施した。その結果は次の通りである。

- ①まず、内容への興味については次の通りである。強い関心が向けられたのは「たまごっち」「喫煙マナー」、反対に関心が弱かったのは「アグネスちゃんの弁当」（彼女の子育ての中で、弁当にかかわる日本文化に慣れる苦勞などの記述）であった。
- ②記事の提示方法は重要である。写真や絵を用いて視覚的に学習者に訴えることは学習者に大きな影響を与える。8割の生徒が「写真・絵の導入で英語学習をする気になった」と回答した。
- ③「英字新聞が社会勉強に役立つか」という質問に対して、90%近い者が「役立つ」と回答した。
- ④「英字新聞の授業は楽しかったか」という質問に対して、75%を超える者が「楽しかった」と回答した。この数字はかなり大きいと言える。というのも、「新聞記事の英語を難しいと思うか」という質問に対して、80%を超える者が「難しい」と回答し、そのうちの25%が「とても難しい」と回答したからである。すなわち、大半の生徒が「難しい」と感じながらも「楽しい」と回答したのである。

以上から言えることは次の通りである。ニュース記事に関して、学習者に身近な話題を選び、

写真や絵など視覚的な効果を考えて利用すれば、彼らの興味を十分ひくことができるであろう。

### 3. 研究の目的

英語指導者がニュース記事を教材として利用する際に、学習者に最適な難易度のものを選定するための一助となるような資料を提供すること、及び指導者自らが容易に英文記事の難易度を調べられる方法を提供することである。具体的には各マスメディアの記事のリーダビリティを算出し、結果を考察する。

### 4. 研究の方法

#### 4. 1 どのマスメディアを利用するか

現代においてはインターネット上に、世界中のメディア各社によるニュース記事が無数に存在していると言える。そこで問題となるのが、どのマスメディアを利用すべきかである。基本的には、信頼のおける会社であればどのメディアでもよいだろう。本論文で利用したのは次の各会社のインターネット版である。文字メディア（新聞、雑誌が基本であるメディア）と音声メディア（放送が基本であるメディア）が存在するが、両社を区別しないこととする。なぜなら、インターネット上ではどちらも文字で表記されており、教材としては必ずしも区別する必要がないと考えられるからである。なお、以下の記述ではメディアの名称につき、略称を用いる（例えば、The New York TimesをNYと記述する）。

メディアの名称	略称	URL	収集月/日（2014年）
The New York Times	NY	<a href="http://www.nytimes.com/">http://www.nytimes.com/</a>	9/10
Los Angeles Times	LA	<a href="http://www.latimes.com/">http://www.latimes.com/</a>	9/11
The Washington Post	WA	<a href="http://www.washingtonpost.com/">http://www.washingtonpost.com/</a>	9/11
USA TODAY	US	<a href="http://www.usatoday.com/">http://www.usatoday.com/</a>	9/17
The Telegraph	TG	<a href="http://www.telegraph.co.uk/">http://www.telegraph.co.uk/</a>	9/16
The Japan Times	JP	<a href="http://www.japantimes.co.jp/">http://www.japantimes.co.jp/</a>	9/12
TIME	TM	<a href="http://time.com/">http://time.com/</a>	9/16
Newsweek	NW	<a href="http://www.newsweek.com/">http://www.newsweek.com/</a>	9/16
NHK WORLD	NK	<a href="http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/">http://www3.nhk.or.jp/nhkworld/</a>	9/16
BBC	BB	<a href="http://www.bbc.com/news/">http://www.bbc.com/news/</a>	9/16
VOA	VO	<a href="http://www.voanews.com/">http://www.voanews.com/</a>	9/12
VOA Learning English	VL	<a href="http://learningenglish.voanews.com/">http://learningenglish.voanews.com/</a>	9/26

これらを選んだ理由は次の通りである。最初の3社（NY、LA、WA）はそれぞれ地方紙で

あるが米国の3大新聞と呼ばれることがある。USは米国で最初の全国紙で、近年まで部数が首位であった（現在の首位はThe Wall Street Journal）。TGは英国で発行部数首位の新聞The Daily Telegraphのインターネット版である。JPは1897年創刊で、現存する英字新聞の中では日本最古である。TMは米国で発行されている世界初の週刊ニュース誌、NWも米国の週刊ニュース誌である。NKは日本の公共放送局であるNHKがニュースや情報を世界に発信するサービスである。BBは英国の公共放送局であり、World Serviceでは世界に向けた国際放送を行っている。VOは米国政府が運営する国営放送で通常の英語で書かれているが、そのうちの1つに英語を母国語としない人々に向けた英語放送がある。そこにおいては平易な語彙と文法が用いられ、通常の3分の2の速さで話される。そのスクリプトはVLのウェブ・サイトで読むことができる。

以上の通り、著名なメディアやライバル関係とみなされるメディア、非母語話者ないし学習者向けの記事について、どの程度の難易度なのかを調査し比較してみたいと考えたのである。

## 4. 2 難易度測定の指標

利用すべきマスメディアが決まったら、次に問題となるのが各マスメディアの記事の難易度を比較するための指標である。

客観的に利用できる代表的な指標として、「語彙のカバー率」と「リーダビリティ(Readability)」がある。本論文ではリーダビリティを用いることとする。ちなみに語彙のカバー率とは、既知語数が記事の延べ語数に占める割合である。内容理解に支障をきたさないためのカバー率は、95%以上とされるのが一般である(Laufer 1989&1992, Schmitt& McCarthy 1997, Read 2000, Nation 2001)。つまり未知語の登場が20語に1語、またはそれよりも少ない場合である。カバー率の算出は本論文では扱わない。なぜなら、カバー率の算出のためには既知語の語彙表を作るなど必ずしも簡単ではないからである。

## 4. 3 リーダビリティ

### 4. 3. 1 リーダビリティとは何か

リーダビリティとは、文章を読みやすくする要因、すなわち単語の難易、単語の長さ、文の長さなどの要因を組み合わせ、公式に代入して計算し、その数字を読書学年レベルとするものである(高梨, 卯城 2000)。例えば、リーダビリティ・スコアが「6.0」の場合、米国の6年生の生徒がその文章を理解できることを意味する。

リーダビリティ公式が初めて発表されたのは1928年の米国においてであった。それ以来数々の公式が発表されており、教育界やその他の分野で多用されてきている。教育界においては、リーディングやESL(English as a Second Language)の教材に対して使用され(Fry, Kress& Fountoukidids 1993)、政府文書や保険契約書その他においても使用されている(Laura 2004)。

それゆえ、リーダビリティ・スコアを算出するための種々のソフトウェアやウェブサイトが存在する。また、マイクロソフト・ワードの米国版にはリーダビリティ・スコアが計算できる機能がついている。

#### 4. 3. 2 日本におけるリーダビリティ

日本においてはリーダビリティが普及しているとは言えないだろう。その理由として、萬戸(2000)は次の3点を挙げている。

- ①リーダビリティを紹介する書籍などが少なく、内容も複雑である。そのため現場の教師がリーダビリティを利用してみようとすゝる気持ちを持ちにくい。
- ②文部科学省の指導要領が、指導すべき内容や単語数などを決めている。そのため、教科書作成の際の関心事は、もっぱら内容が指導要領に適合することであつて、リーダビリティには関心が向けられない。
- ③伝統的な指導法である訳読式教授法においては、文章の難易はそれほど問題とならない。指導者は読み手がその領域に達するよう指導し、学習者としてはそれが理解できるように努力することこそが重要である。

しかしながら先述の通り、学習者の実力に応じた教材を利用することは効率的な学習にとって必要である。コンピューターが発達した現代においては、指導者はリーダビリティに関心を持ち、自分で調べてみることも必要であろう。

#### 4. 3. 3 リーダビリティ公式Flesch-Kincaid Formula

リーダビリティ公式には様々なものが考案されてきている。例えばFlesch-Kincaid Formula、SMOG Formula、Fry Graphの3つの指標はリーダビリティの予測に適切であるが、その中でもFlesch-Kincaid Formulaが最も適切である(中條, 2011)。この公式は「語数、シラブル数、文教」の要因を組み合わせて読書学年を算出するものであり、国内外の多くの研究で用いられている。

表1は「リーダビリティ・スコア=米国の学年」と「文の難易度」の対応を示す(染谷, 「リーダビリティ」の測定について)。米国の学年と日本のそれとは異なつていてわかりにくいので、日本式の学年も記載しておく。勘違いしてはいけないのは、例えばある記事のスコアが7.0の場合、難易度が米国の中学1年生程度を指すのであつて、日本の中学1年生が理解できるレベルというわけではないことである(日本の中学1年生は3.5である(後述の表3))。

表1 Flesch-Kincaid Formulaと難易度

スコア=米国の学年 (日本式の表記)	難易度
5.0 (5年生)	very easy
6.0 (6年生)	easy
7.0 (中学1年生)	fairly easy
8.0-9.0 (中学2-3年生)	plain English
10.0-12.0 (高校1-3年生)	fairly difficult
13.0-16.0 (大学1-4年生)	difficult
17.0- (大学卒業以上)	very difficult

表1の「難易度」の項目“plain English”という表現はFleschが使用したもので、彼が主張する最適な領域である。一般的には「標準的 (standard)」と考えてよいだろう。これは年齢的には日本の中学校卒業レベルであって、義務教育終了程度と考えればわかりやすい。なお、1979年英国でボランティア団体「Plain English」によって「Plain Englishキャンペーン」が始められ米国にも広まった。彼らの主張は「政府の文書は一度読んでわかる plain Englishで書かれるべき」ということである。

#### 4. 4 実際の算出方法

各マスメディアのインターネット上の記事をコピーし、マイクロソフト・ワードにペーストする。これを繰り返し、1つのマスメディアにつき、ワードにおける語数が10,000になるようにした。この数字は中條(2003)にならった。また、固有名詞、数字、略語などもそのまま使用した。

Flesch-Kincaid Formulaを用いた計算を行うために、無料で利用できるウェブ・サイト「Readability-Score.com」を利用した。なぜなら、英語教師が手軽に自分で調べることができることを考えて、専用のソフト・ウェア等はないほうがよいと判断したからである。各メディアの10,000語のデータをこのサイトの入力欄に貼り付けenterキーを押せば、すぐにスコアが表示される。

## 5. 結果

調査した素材と調査結果を表2にまとめた。

表2 調査した素材及びFlesch-Kincaid Formulaによる算出結果

メディアの名称	略称	記事名及び記事数 (合計)*	リーダビリティ・スコア
The New York Times	NY	Scottish Socialists Push for Yes Vote to Smash 'British Imperialist State'など8	9.4
Los Angeles Times	LA	Obama says U.S. will destroy Islamic State in Iraq, Syriaなど12	10.5
The Washington Post	WA	U.S. threatened massive fine to force Yahoo to release dataなど8	9.8
USA TODAY	US	Baig: iPhones 6 and 6 Plus are a very big deal など15	9.0
The Telegraph	TG	Scottish independence: women voters could save the Unionなど16	11.6
The Japan Times	JP	Daily Asahi Shimbun retracts faulty Fukushima story, sacks top editorなど21	11.3
TIME	TM	U.S. to Commit \$500 Million, Deploy 3,000 Troops in Ebola Fightなど23	11.5
Newsweek	NW	Scottish Socialists Push for Yes Vote to Smash 'British Imperialist State'など12	9.4
NHK WORLD	NK	US expands offensive against Islamic State など29	8.7
BBC	BB	US air strikes to support Iraqi troops under attack など24	11.4
VOA	VO	Pistorius Found Guilty of 'Culpable Homicide' など21	11.4
VOA Learning English	VL	Deforestation Is a Threat to the Amazon など22	8.2

網掛け：最も低い数値の上位3つ      下線：最も高い数値の上位2つ

記事の収集を行ったのは2014年9月14日から26日。

\*記事数の合計のうち最後の記事は、語数を調整するため部分的となっている。例えば、記事数8の場合、7個の記事は完全だが、8個目の記事は部分的である。

参考として、日本の英語教科書のリーダビリティ・スコアを記す(表3)。この表は中條(2004)から拝借したものである。なお、現在は指導要領が改訂されたために多少誤差が生ずるかもしれない。



表3 学校英語教科書\*1のリーダビリティ\*2

学年	リーダビリティ
中1	3.5
中2	4.3
中3	4.9
高1	6.6
高2	6.2
高3	8.7

\*1 使用された教科書は次の通りである。中学校につきNew Horizon 1, 2, 3 (東京書籍 2000)、高等学校につき Unicorn I, II, Reading (文英堂, 1997, 1998, 1999)

\*2 Flesch-Kincaid Formulaを使用

## 6. 考察

### 6. 1 難易度の高いメディア

リーダビリティ・スコアから判断して最も難易度が高いのは、TG (11.6)、TM (11.5) である。TGは英国で発行部数首位でありながら日本の学習者の間ではあまり知られていない。一方、TMは学習者の間では難しいとの定評がある。ただ、数値を見る限り米国の高等学校レベルである。その他のメディアの記事に関しても、すべて高等学校レベル以下である。これは、日本の場合を考えても納得できることである。すなわち、日本で発行されている日本語の各種新聞・雑誌などは、高校生であれば読むことができるのであるから、米国や英国でも同じということであろう。

なお、しばしばTMと並び称せられるNWは、「TMよりも易しい」と言われるのが一般である。今回の調査でNW9.4との結果となり、TMよりも2.0ほど低く、一般的に言われていることを裏付ける結果となった。

### 6. 2 難易度の低いメディア

最も難易度が低いのはVL (8.2)、NK (8.7)、US (9.0) であった。VLは、学習者向けに平易な文章で書かれているので、「最も容易」との結果は当然と言えよう (VOは11.4で他のメディアと同等である)。NKは、日本の放送局が世界に発信することを目的としており、対象は非母語話者も含まれているから難易度を下げているのだろう。USは米国のものだが、全国版の大衆紙という性格上、読者層は多様であって、難易度は低めにしていると考えられる。

なお、「最も容易」なVL (8.2) は米国の中学2-3年生レベルであるが、日本では高校2-3年生レベルである。

### 6. 3 ニュース記事の教材としての利用

ニュース記事の利用は中学生の学習には厳しいだろう。なぜなら、最も容易なVLが8.2であるのに対し、中学生用教科書のリーダビリティ・スコアが5.0未満だからである。高校1年生が6.6、3年生が8.7ということから、高校生の学習にニュース記事を活用することは可能であろう。ただし、記事内容に関して中学生が高い興味を示しているもの（例えばスポーツや映画）は授業で読ませれば高い教育効果が得られるかもしれないが、逆に高校生であっても内容に興味がないければ教育効果は発揮されないだろう。どのメディアを利用すべきかにつき、高校生については難易度から判断すればVLと言えよう。また大学生に対しても、一部の英語力が高い学生を除いて最も容易な上位3社が適切ではないだろうか。そして記事内容を吟味することも必要であろう。

VLのウェブサイトを利用する場合、記事中の単語がわからないとき、その単語にマウス・ポインターを当てれば、単語の意味の説明が英語で表示され、発音も音声で確認できる。また、記事の音読を聞くこともできる。

NKを利用する場合、当該の記事に関する日本語版の記事と比較することができる。日本語の記事が英語ではどのように表現されるのかを学ぶことができる。なお、日本語との比較という点では他にも様々なメディアを利用できる。例えばNWには日本版があるし、調査対象になかったが朝日新聞、読売新聞、毎日新聞にはそれぞれ英語版とも言えるThe Asahi Shimbun、The Japan News、MAINICHIなどもある。

## 7. まとめ

1. で設定したリサーチ・クエスチョンは次の3点であった。

- ①ニュース記事は、どのマスメディアのものを使用すべきか。
- ②ニュース記事の難易度には差異があるか。
- ③難易度の指標は何を用いるべきか。

これらに対する解答は次の通りである。

- ①ニュース記事は、一般的に知られており信頼のおけるものであればどれでも利用可能である。重要なのは学習者の難易度に適合しているものを選定することである。
- ②リーダビリティの観点から、ニュース記事に難易度の差は存在した。全国紙か地方紙かの違いや、一般向けか英語学習者向けかによって差が生ずることがわかった。ただし、ネイティブ話者にとってはどれも高校生またはそれ以下の難易度であった。
- ③今回用いた指標はリーダビリティであった。記事を選定する最初の段階では、有用性が高いのではないだろうか。ただし、内容の吟味もしなければ学習者の学習意欲を高めることはできないだろう。

以上の解答を踏まえて、以下まとめを述べる。ニュース記事は英語の学習素材として非常に有

益である。情報の収集やリーディングの練習のみならず、素材の利用の仕方次第で、文法、発音、リスニングなど様々な技能を訓練することもできる。このような豊富な役割を果たす可能性を秘めた素材であるからこそ、その取捨選択が重要となる。本論文では一般的なリーディング学習を念頭に置き、リーダビリティの観点から素材選びの方法を提示した。

今後の研究課題としては次のものが挙げられる。

- ①各メディアの10,000語のサンプルを20,000語にする。リーダビリティ・スコアをさらに厳密にするためである。
- ②読解の難しさは、リーダビリティ公式だけで測定できるものではない。本論文で用いたFlesch-Kincaid Formulaなど多くのリーダビリティ公式が用いるのは「語数、シラブル数、文数」である。しかし、ここに含まれていない「語彙の難易度」も重要である。そこで「カバー率」による調査も行う必要があるだろう。
- ③読解の難しさは、リーダビリティ・スコアやカバー率といった客観的指標だけで判断できるものではない。ニュース記事で頻繁に使用される比喩表現を理解できるか否かも重要である。また、記事内容に関するスキーマ（背景知識）を有しているか否かも内容理解に大きく影響する。なぜなら、読解は単に言語だけの問題ではなく総合的な知的活動だからである（岡，森本 2013）。今後は、比喩表現の事例研究やスキーマの有無が読解に与える影響についても研究する必要があるだろう。

## 【参考文献】

- Newspaper in English教育に新聞を（2014.9）<http://nie.jp/>
- 染谷泰正「リーダビリティ」の測定について 2014.10）<http://someya-net.com/wlc/readability.html>
- 田嶋英治（1996）「英字新聞を使ったリーディング指導—NIEで生き生きした授業—」、『英語教育』11月号，45（9），pp.23-25, 47（8），pp.17-19
- 水野義明（1983）「もうひとつの英語授業—『英字新聞の『読解』について—」、『明治大学教養論集』161，pp.125-144
- 新堀孝（2005）「英字新聞を活用した教養英語」、『英語教育』2月号，53（12），pp.28-30
- 上西幸治（1998）「英語教育における英字新聞導入に関する研究—学習者の意識及び影響を中心にして—」、『中国地区英語教育学会研究紀要』，No.28，p.41
- 高梨庸雄，卯城祐司（2000）『英語リーディング事典』，研究社出版
- 萬戸克憲（2000）「テキストの難易の測定とリーディング指導」、『英米評論』15，桃山学院大学英語英米文学会，pp.91-115
- 中條清美（2011）「英語初級者向けコーパスデータとしての教科書テキストの適性に関する研究」、『日本大学生産工学部研究報告B』第44巻，pp.13-23
- 中條清美（2004）「語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学英语入試問題の難易度」、『日本大学生産工学部研究報告B』第37巻，pp.45-55
- 中條清美（2003）「時事英語の授業で用いられる英文素材の語彙レベル調査—BNC（British National Corpus）を基準にして—」、『時事英語学研究』42，pp. 51-62
- 岡秀夫，森本治子（2013）「フィンランドのMatriculation試験—大学入試センター試験との比較—」，

- 『目白大学高等教育研究』第19号, pp23-32
- Laura, M (2004) *Readability in English Entrance Examinations* 『紀要 言語・文化・社会』第2号, 学習院大学外国語教育研究センター, pp.139-200
- Laufer, B. (1989) *What Percentage of Text Lexis Is Essential for Comprehension?*. In Lauren,C.and Nordman, M. (Eds.) *Special Language: from Humans Thinking to Thinking Machines*. Clevedon: Multilingual Matters. pp.316-323
- Laufer, B. (1992) *How Much Lexis Is Necessary for Reading Comprehension?*. In Arnaud and Bejoint (Eds.) *Vocabulary and Applied Linguistics*. London: Macmillan. pp.126-132.
- Schmitt N.& McCarthy,M. (1997) *Vocabulary, Description, Acquisition and Pedagogy*. Cambridge: Cambridge University Press
- Read,J. (2000) *Assessing Vocabulary*. Cambridge: Cambridge University Press
- Nation, I.S.P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language.*, Cambridge:Cambridge University Press
- Fry, E.B., Kress J.E., and Fountoukidids, D.L. (1993) *The Reading Teacher's Book of Lists*, West Nyack, New York: The Center for Applied Research in Education
- Readability-Score.com (2014.9.26) <https://readability-score.com/>

(平成26年11月4日受理)